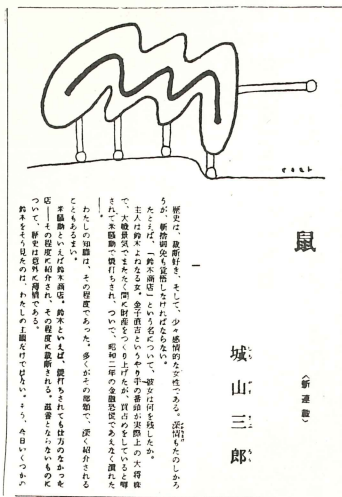


「ねずみ」をすすむ

久 琢 磨

私は昭和二年春の大騒動の社員大会で「鈴木と金子は一体で不可分である。金子さんを追い出すとは不届千万だ」と大喝一声となりまくった。この勢に押されてか兎に角留任勧告委員を選んでこの会は終わったが満場一致の共鳴をうけると思った私の発言は反対こそなかったが、割れるような共鳴はなく、打ちそこねの花火のようにしゅんと消えた形であった。この会場から出てくると待ち構へていたように学校の先輩のT氏が私をある応接室に入れ、「君



はあんな発言をしてけしからん。君はなんにも知らんのか。台湾銀行などの債権者から、丁稚上りの旧式経営ではこの難関は切り抜けない。この機会に金子さんを勇退させて、高畑、永井、北浜といった高商出を中心に近代経営に切換へよ、さすれば充分金融の応援もしてこの危機を乗り越えさせてやる。とのことでみんな、この際金子さんに引退して貰うことに決まっているんだ。君は馬鹿だなあ」と話された。

T先輩はおそらく私が金子さんと同郷であることを知らなかったらしい。私は無論T氏の言うこと位は承知していたが、たとえ無駄であっても止むにやまれず西岡勢七氏らに押されて発言したまでであった。ところがこのすぐあとで北浜支配人から、「君

はご苦労だが印度カルカタ支店に転任して呉れ。先方が急いでるから明日でも出発して呉れ」と命令された。会社の破綻さわぎの際に遠島命令とは、おそらくあの発言のために出陣の血祭にあげられたのだと自分ながら判断した。

他の先輩諸氏に相談してみたが私の判断に間違はなかった。そこで私は長文の声明書と辞表を出して金子さんに殉じの一番にお店を辞めた。こんな次第であったから他の鈴木関係の会社や仕事には受入れられず止むを得ず石井先輩をたよって東京朝日新聞に入社した。

朝日に入社してから数年後、今の細川隆元や河野一郎といった口の悪い連中から「久君、君はあの鈴木に居たそうだね。鈴木は米の買しめや多額の手形を震災手形でゴマかさんとした国賊だ。金子という男はよほど悪党だ。君もその乾分なら相当なものだろ」と悪罵冷笑をあげせられたことであった。あまりの口惜しさに私はある日築地の小松屋に泊っておられる金子さんを訪ねた。春雨のしとしとと降っている日曜であった。金子さんはしんみりとした気分

自身でやれない工業を鈴木が政府に代って——開発したので。これには多数のお金があった(今日の設備投資)これはいわば政府の代行だから震災手形スタンプ手形くらいの扱いをして呉れてもよいではないかと言

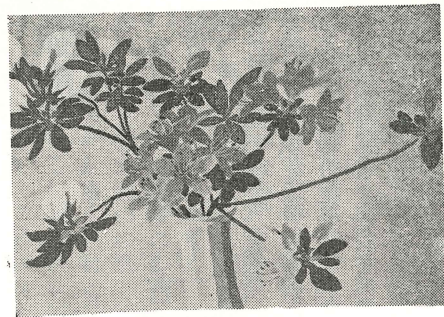
い浜口さん若槻さんも承認して呉れていたんだ。それを朝日などが正面から反対したんだよ。殊にその前の米騒動などは、心外でたまらない。米の買占め輸出は三井さんの仕事で鈴木はやっていない。全くの誤解だよ」とのこと。

しかし天下の朝日の報導したことは真相とかけとられ、殆んど事実と認められていながら鈴木に縁を持つものまたその子孫は国賊鈴木に飯を食ったことには少なからず肩身がせまい。鈴木本家のお孫さんは学校でこの話を聞き、いたくしおれて「お

ばーちゃん、なんでうちの先祖は悪いことをしたの」と泣いて聞かれたという。たつみ会員の皆さんのうちにもこうした苦い経験をお持ちの方も多かろうと思う。私はなんとかしてこの汚名を天下に雪ぎたいと予て念願していたところ、同じ朝日に在社の松島誠氏の令息から、同じ思いでこの真相を明らかにしたいからと経済小説作家の城山三郎氏を紹介し

てきた。

そこで先般城山氏を太陽鉱工で鈴木治雄さんと橋本隆正さんに紹介しさらに鈴木本家にも案内し、元の谷の金子旧邸にも案内した。この後この城山氏は尚関係官庁、新聞社や当時の鈴木に縁のある生き残りの人々にインタビューして材料を募集し、この十月から雑誌「文学界」に「鼠(ねずみ)」と題して連載している。私は「文芸朝日」に書くものと思っていたからうかつにもまだ読んでいないが少なくとも今十二月号を読んだだけでも、米騒動の本元は三井であって鈴木ではない。あれは冤罪だった。鈴木は国賊ではなかった。ことだけは充分判る。是非皆さんに読んでいただきたい。



小倉遊亀さんへ(部分)

私の昨今

土居 英 成

私は、伊勢の山奥、神路山の麓、五十鈴川の畔に、貧乏の庵生活を初めましてから彼れ是れ二十数年になりました。

この間王維の詩の如く「興来って常に独り往く、勝事は空しく自ら知る、行いて水の窮る所、座して看る雲の起る時、偶然、林叟に値い、談笑して還る時を遅らしむ」の如く、毎日神路山の山深く、五十鈴の流を上って、霞を吸い日精を喰いての生活です。

天地に私なく、私にも梅の咲く春が音づれて来ました。まことに凡作であります、

梅さいて八十の春を祝いけり

春 水

又年頭には

昭和乙巳新年口号 春 水

聽得鷄鳴起早晨。
淨身鈴水拜皇神。
巨杉蠹々千年翠。
萬象一新迎瑞春。

い。何にも知らない君等に迷惑をかけて誠に相済まん。実は三井の陰謀と朝日の悪筆台湾銀行の森の奸計にやられたのだ。今日は暇じゃからな

ぜ鈴木が整理に到ったかの真相を詳しく話すから聞いてもらいたい。」と延々半日にわたってこの経緯を話してくれた。私はこれは非常に大切なことだと思つたので一々メモし帰ってからです、原稿用紙にまとめて記録した。これは何かの時に役に立つと思つて大切に保存していたが戦災で焼けてしまった。しかしあの日金子さんから涙ながらに聞いたことは、若い私の脳裏に深く印象されたので、今の今でも一字一句違はずに記憶している。

この話によると、今後の日本は工業立国でこの製品と輸出する商業立国、即ち商工立国でなければならぬ。そのためには先づ工業を盛んにしなければならぬ。現在の日本の民間経済では到底それだけの科学の力と財力がないから、国家が卒先援助してやらなければならぬ。わしはこの商工立国政策を度々政府に進言して来たが仲々判って呉れない。流石にさきには後藤新平先生、後には浜口雄幸先生が理解共鳴されて、陰に陽に援助してくれた。そこで政府

鶏鳴を聴き得て早晨に起き、身を鈴水に浄めて皇神を拜す、巨杉蠹々千年の翠、萬象一新瑞春を迎ふ。

迎八十歳偶感 春 水

禿頭澤澤又逢春。

熱血猶余八十身。

素食弊衣君莫笑。

丹心一片守清純。

禿頭澤澤又春に逢ふ、熱血猶余す八十の身、素食弊衣君笑ふなかれ、丹心一片清純を守る。

昔西行法師は、この地に来り住んで、今にも西行谷として残っています

すが、伊勢神宮に詣でての歌に

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなきに涙こぼるる

七百年後、私もこの歌を静に吟詠いたしまして、只た只大神の深いみ

恵を感謝して、ありがたいその日その日を送らして頂いています。

(元鈴木商店庶務課長)